
俺の幼馴染は変わり果てていた イナズマイレブンGO

サラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の幼馴染は変わり果てていた イナズマイレブンGO

【Nコード】

N8609X

【作者名】

サラ

【あらすじ】

主人公・足立沙羅は、幼馴染の相川涼輔とともに雷門中に転校してきた中2のサッカー大好き少女。

サッカー部に入部するが、なんと次の日から一週間合宿に行くことになって……！？

たまーに、というかほとんどギャグっぽいと思います。

シリアスなんて……！ よほど重いときムードの時しか書けないぜ……。

都合上、南沢先輩が雷門にいます。

ギャグっぽいけどいちおう恋愛っぽくしたいなあ……とか。
サッカーしてることかほとんど無いよ！

全然原作のストーリーとは関係ないです。

オリジナルキャラが出てくるのは……もう分かってるか。うん。

まあ、そんな感じのラブコメディーです。

プロローグ：風（前書き）

ども、恋愛小説とか書けるわけねえと思ってたのに書いちゃった
サラです。

とりあえずどうぞ見てってください。

プロローグ：風

「へー、ここが雷門中か」

アタシは校舎を見上げていった。

アタシの名前は足立沙羅。あたちさろ

水色のショートヘアで、顔つきは男っぽいとよく言われる。

そのせいで、制服を着て登校しようとしてるだけで警察に捕まりそうになるほどだ。

「楽しみだね、沙羅」

アタシの隣でこう言った少年は相川涼輔あいかわりようすけという。

きれいな金髪とメガネが、太陽の光を反射してきらきらと光っている。

いざ踏み出そうとしたとき、後ろから大きな声が聞こえてきた。

「うわああああああああ、ぶつかるうううううううう!!」

「「は?」」

ドッサーン!!

叫びながら走ってきた少年と思いつきりぶつかった。転校初日からこんな不幸続きで、大丈夫だろうか、少し不安になってくる。

不幸とは、まず登校中に電柱に真正面からぶつかって、途中で警察に捕まりかけ、その上逃げ回っているうちに道に迷った。

これはたぶん、アタシが星座占い・血液型占いのどちらも最下位だったからだろう。

「ふわあ!　びっくりした……って、大丈夫ですか!？」

茶色の天然パーマのような髪に灰色の目。

なんか、どこかで見た覚えが……。

アタシはそんなことを考えた。

ぶつかってきた少年は、まず飛び起き、こちらに声をかけてきた。

大丈夫、とアタシが返事をする、少年はほっとしたように胸をなでおろした。

彼はさっと立ち上がってから、二人の顔を見つめ、こう言った。

「もしかして、貴方たちって足立沙羅さんと相川涼輔さんですか？」

何で名前を……？

当然の疑問を抱く。

「何で俺たちの名前を知ってるんだ？」

気持ちを代弁するかのように涼輔が言う。

「覚えて無いんすか？俺です、松風天馬です……！」

松風天馬。

そういえば……

「あ、こないだ河川敷で練習してた……」

「そうです！そのときボールを沙羅さんに拾ってもらって」

涼輔も納得がいったようだった。

「ところで天馬。お前、なんか急いでたみたいだったけど……」

そう涼輔に言われ、はっとしたように天馬が言う。

「やばい！俺、サッカー部の朝練行かなきゃ！じゃあ沙羅さん、

涼輔さんまた後で！」

すると天馬は風のように走り去っていった。

「松風天馬……。アイツ、雷門中に風、いや嵐を呼びそう……」

アタシは天馬の後姿を見送りながらそっと呟いた。

プロローグ：風（後書き）

……プロローグだからって短い気がするのは私だけだろうか。
天馬「んなことないし。それより作者は調子に乗りやすいからいい
ところより悪いところバンバン言ってね」
ありがとーございましたーつづきも待っててくださいー。
天馬「誰も待つてる奴なんていないと思うよ」

1話：転入生。（前書き）

一日で一話書けるんだったら、すぐ完結しそっだな。
とりあえずどっぞ。

1話：転入生。

「はあ、疲れた」

俺は教室の机に突っ伏した。

「おいおい神童。お前それでもサッカー部のキャプテンかよ」

そう呆れたようにいうのは、親友の霧野蘭丸。

あ、そうそう。俺の名前は神童拓人。

さっき言われてたように、雷門中サッカー部のキャプテン。

「分かってるさ。でも、昨日は眠れなかったんだ。そつとしてくれよ」

そう答えると彼はさらに呆れたようだった。

「まあいいけどよ。あ、そういえばさ、さっき職員室前通ったら、担任と一緒に男みたいな女子がいたぜ」

何だそれは。

あ、これじゃ失礼か。

何だそいつは。

俺は、自分でも壊れて行っている気がしてきた。

「俺が思うに、転校生だと思っんだ。担任と一緒に居たんだから、たぶんうちのクラスだぜ」

「ふーん？」

俺はあいまいな返事をした。

まあ、どうってことないし。

俺がまた机にうつぶせようと手を伸ばすと、蘭丸はちょっと意地悪く笑んだ。

「たぶん、お前にとって刺激的な奴だと思っぜ」

「……？」

どういう意味だろうかと考えながらも、俺は机にうつぶせた。

その途端担任が教室のドアをあけ入ってきた。
くそっ、寝ようと思ったのに。

担任の隣には、どこかで見かけたような少女がいた。

制服じゃ無かったら、”少年”と言っても違和感は無かっただろう。
「えー。今日は転入生がこのクラスに来る。……って、言っていたか？」

『聞いてません』

クラス全員が息をそろえて言う。

俺は言わなかったけど。

そんな様子を見て、少年のような少女はクスクス笑う。

なんだ。笑うと女の子みたいじゃん。

「そうか。まあいいだろう。その転校生って言うのがこいつ、足立沙羅だ」

そう説明されると、沙羅と呼ばれた少女はニコツと笑った。

「はじめまして、足立沙羅です。趣味はサッカーと歌うことです。よろしくお願いします！」

沙羅と呼ばれた少女は、微笑みながら、年相応の元気さで言った。
なんだ。声は以外に女の子っぽいじゃん。

「よし、席は……神童の隣な。まあ、空いてる席なんてひとつしかないけど」

沙羅は俺の隣の空いてる席に座る。

きれいな薄水色のショートヘア、きりつとした瞳。

なんか、見方を変えれば美少女だな。

「よろしくね。たっくん」

「なっ……！」

沙羅は、こちらを振り返って言った。

『たっくん』なんて、親にも呼ばれたこと無いぞ！！
て、いうか何で俺の下の名前知ってたんだよ！！

まあ、サッカー好きなら知っておかしくも無いけど。

けど……けど……なんでそんなに馴れ馴れしいんだよ！！

「くくつ。やっぱたっくん変わんないね」

笑う沙羅。

「ほら、俺の言ってたこと当たったろ。お前にとって刺激的な奴だつて」

後ろから蘭丸が囁いてくる。

なんかイラッとした。

後で殴ってもいいかな。親友だけど。

「蘭丸お前」

「そこうるさい。授業始めるぞ」

「はい」

蘭丸と沙羅がとぼけたように返事をした。

それが俺と沙羅との2度目の出会いだった。

場所は変わって、3年教室。

あーあ。嫌な奴と隣になっちゃった。

俺は相川涼輔。

まあ、雷門中に転入してきたけど、一番嫌な奴と隣になってしまった。

嫌な奴ってのは、南沢篤士。

あれ？ 下の名前の『し』ってさ、あれで良いんだっけ？

そもそも『あつし』だったっけ？

まあいいや。

「よくねえよ」

あらっ？ 心の声聞こえてた？

まあいつか。

そんなことより。

「おい南沢。四六時中睨みつけてるようなことはすんなよ」

「ふん。その申し出、丁重にお断りさせていただく」

くっそ、あの態度が気に入んねえんだよ！！

「ところでお前、部活やっぱサッカーやんのか？」

「当たり前だ。沙羅が入るって言ったし、俺も入りたいし。何しろお前をからかえるしな」

「ふん。俺もお前のアホ面見てるの楽しいから、まあいいか」

「何だこのナルシスト野郎」

「そっちこそロリコンの癖に」

あ、イラッとした。

口っ！ ロリコンとか……べっ！ 別にそんなんじゃ……………
おっほん。

危うくツンデレっぽくなるところだった。

「このメガネ野郎！」

「キザったらしい女たらし！」

俺と南沢の視線に物理的な力があつたら、火花が散っていたであろう。

「おい南沢と相川！ 授業中にケンカはやめろ！！」

先生にそう注意されたからには、続けるわけにはいかなかった。

まあ、今やっているとこなんて、前の学校ではとくに習ったところだったので、特にすることも無かったが。

「この決着は後でつけてやる……」

南沢が独り言のように呟いたそれを、俺は聞き逃さなかった。

まあ、そんなことより俺が何で南沢を嫌っているか説明するか。

それは、今から5年前のこと。

俺と沙羅が公園でボールを蹴って遊んでいた。

と、そこに女子に囲まれてるリア充……つまり南沢がいたわけよ。
うん。

まあ、最初っから知ってたけどよ。南沢のこと。

南沢は女子を全部……じゃ無かった。

全員追っ払ってから俺らの方に来た。

何しにきたのかと思ったら、いきなり沙羅の体を抱きしめるじゃないか！！

沙羅、ワケが分からず気絶。

俺、超激怒。

南沢、腹を抱えて笑い出す。

笑い出す南沢を見て、俺の怒りゲージは満タン。
思わず殴りかかった。

それを見てた女子から悲鳴が上がった。

「いやああ！ 南沢君があ！」とか、「きゃあああ！！」とかさ。

うん、よく考えるとあいつら、このクラスの女子じゃん。

まあいっかそんなこと。

南沢はよけようともせず俺の拳に当たり後ろへ飛ぶ。

そしたら、動かなくなっただんで様子を見に近づいた。

そしたら顔をパンチされた。

くっそ、今思い出ただけでも腹が立つ！！

パンチを喰らった俺を見てアイツは一言。

「人を騙すことも、実力のうちだよ。メガネ君」

そのままあいつは去っていった。

あー、今思い出したのがいけなかった。
無性に殴りたくなってきた。

あーイライラする。

イライラする。（大事なことなので2回言いました）
ふと隣を振り向くと南沢は眠っていた。
うわっ、こいつ……。

起こしてやろうと一発殴る。

「いたっ！」

そう小さく言い、目を覚ます南沢。
ざまあみたか。

「お前……」

あ、完全に怒りスイッチ入ってるな。
まあほっところ。

「相川のばっきゃろおおおおお!!」

その声と同時に、今日の全ての授業の終わりを示す鐘がなった。

よし、帰るか。

1話：転入生。（後書き）

はい。神童・蘭丸・南沢の三人、キャラ崩壊してます＼（＾o＾）／
絶対南沢叫んだりしませんよね。

蘭丸もそんな意地悪そうじゃないし。

神童はもうだめだ。

気品が感じられなくなってる。

まあいいや。（よくねえ

感想とかくれたら、部屋中踊って回ります。（迷惑だ。

それでは近いうちに会えることを祈りつつ。

2話：異様な入部希望者（前書き）

今回も（？）シリアス場面は見られません。
ギャグだらけですがどうぞ。

2話：異様な入部希望者

キンコンカーンコンと、今日の授業全てが終わる鐘の音と同時に、南沢先輩の、

「相川のばっきゃろおおおおー!!」

という声が聞こえたのは気のせいだろうか。

隣の沙羅にも聞こえたらしく、彼女も少し困惑気味だった。

「ねえ、今の叫び声聞こえた?」

「うん。南沢先輩の声だった」

「なんかどつかで聞いたことある気がする……。とりあえず、相川って言うのはアタシの兄さんみたいな人の事だよ。きつと」

「誰だよそれ」

俺が聞くと、蘭丸が呆れたように言い返す。

「お前、そっちも忘れたのかよ。沙羅といつも一緒にいる、お兄さんみたいな人だよ。相川涼輔って人」

「ふーん」

まあ良い。そんなことより、俺は聞いてみたいことがあった。

「沙羅って部活何入るんだ?」

そんなことかと言うな。

「え? もちろんサッカー部に決まってるだろ!」

沙羅はカバンを肩にかけながら返事をする。

そうやってかけるんだ、カバン。

たまーに、女の子らしいところあるんだな。

最後の『だろ』で台無しだけどね。

「ふーん。ていうか決まってるないし」

「アタシの中じゃ決まってるの!!」

「あー、ハイハイ分かったよ」

そう答えると沙羅は満足したようだった。

「分かればいいんだ。それより早く部屋連れてってよ！」
急かす沙羅。

腕を掴んで振り回すんじゃない。
痛いだろ。

それを見た蘭丸が、クスツと笑う。

「それじゃあ行くか」

「本当!？」

その時沙羅が腕を放して突き飛ばしたために、俺はイスから転げ落ちた。

くっそう。

「やったあ! 早く行こうたつくん!」

あーもうその呼び方やめろと思ったけどまあいいや。

「分かったよ」

そうして俺ら三人は、沙羅に腕を組まれ廊下に出た。

「久しぶりだな、お前ら。沙羅、俺のこと忘れてなかったか？」

そのすぐ後、上から声が降ってきた。

声の主のほうに顔を向けると、そこにはメガネをかけている金髪の上級生が立っていた。

上級生かは知らんけど。勘だよ、勘。

まあ、背が高いからっていうのが理由なんだけど。

「涼輔! 忘れてないよ!!」

沙羅はするつと俺と蘭丸の腕から手を離す。

するとそのままその上級生にダイブっ!

……後ろに倒れた。

すると、その後ろに南沢先輩がいるのが見えた。

あ、居たんだ。

「何気にひどいな、お前」

あ、心の声聞こえてたんだ。

すごっ!

「そいつは心の声、自分の悪口しか聞こえな グフウ」

涼輔と呼ばれた上級生の声が最後まで聞こえなかったのは、南沢先輩が腹を蹴ったからだ。

「うるさい黙れロリコン野郎」

「はー！？ それはお前も一緒だろー！！」

ヒートアップする涼輔さんと南沢先輩のケンカ。

それを止めに入る沙羅。

愉快そうに見てる蘭丸。

よく分からないまま立ち尽くす俺。

……何だこの構図は！？

「この金髪メガネ！！」

「変な髪形！！」

「何だと！！ 授業終わりに叫んだ馬鹿野郎！！」

「くウツ……」

あ、やっぱり叫んだの南沢先輩だったんだ。

なんかウケる。

「何だこの金持ち野郎！！……ってこれじゃ悪口じゃねえな」

「また心の声聞こえてたんですか。とりあえず何があったか知りま

せんが、ケンカやめてくださいよ。こんな廊下で」

俺の一言で二人の先輩は、お互い掴んでいた手を放した。

俺ってそんな説得力あること言っただけ？

「まあいい。とりあえず神童。お前俺のこと覚えてないだろ」

図星

俺キモい。

「たつくんさー、涼輔どころかアタシのことも覚えて無かったよ！
全くひどい奴だ。」

「お前ッ！」

俺は無意識のうちに沙羅の口を手で塞いだ。

「むがつ！？」

ぶつと噴出す涼輔先輩。

「沙羅お前まだそんな風に呼んでんのかよ」
まだ腹を抱えて笑っている。

「まあいいや。それより覚えてないんだったら自己紹介と行きますか。俺は相川涼輔。まあ、3年。好きなことはサッカーとか。よろしく」

そう簡単に自己紹介をした涼輔先輩は、少し微笑んだ。
笑うとカッコよさが増すな。

「それよりさー、早く連れてってよ、部室！　せつかくサッカー部入ってあげるんだからさ！」

「上から目線やめろよ沙羅。神童連れてってくれなくなるかもしれ
ないぜ？」

蘭丸が例の意地悪い笑みを浮かべ言う。

「分かったよ。とりあえず早く行こう！」

沙羅はまたも言う。

とりあえずそこにいた皆でサッカー部室に向かった。

サッカー部室に着いた。

早いわけじゃない。

作者が飛ばしただけだ。

まあ、アタシはどうってこと無いけどね！

「部室とかってこつちに別にあるんだ」

いままで思ってたことを口にする。

「まあ、そうなんだ」

神童、言い方変えればおばさんぽくなるぞ。

そっだったんだみたいな意味で。

ウィーンと、ドアが開く。

「あ、キャプテン達！」

部室にいた一人、もとい天馬が言う。

「天馬だー」

アタシは感情の無い声で言う。

「沙羅先輩！ 涼輔先輩！ ……ていうかそんな無感情な声で呼ばないでください」

お、天馬でも気づくんだ。

当たり前か。人間なんだし。

「先輩たちがここに来たって事は、やっぱりサッカー部に入るんですか？」

「当たり前だ」

涼輔と声が合ってしまった。

まあいいけど。

「やった！ 沙羅先輩たちとサッカーできる！」

天馬は飛び上がらんばかりに喜んでいる。

そんなにうれしいのか。

「んで、お前らはその人のこと知ってるみたいだけど、俺らは知らないんだから紹介しろよ」

褐色の肌をした、水色っぽい（？）髪の子がイラついたように言う。

「分かったよって言うかもとよりそのつもりだったし。こつちの水色の髪のは足立沙羅っていつて、俺と同じクラスに転入してきた。それで、その沙羅の隣で南沢先輩とにらみ合ってるのは相川涼輔先輩。南沢先輩と同じクラスだそうです」

そう神童が説明し終わると、皆納得したといふかなんといふかつて顔をした。

まあ、そうだろうな。

自分で言うのもなんだけど、こんな異様な二人組みがいるんだもん。そりゃあんな反応してもおかしくない……………と思う。

すると部室のドアが開く音がした。

振り返ってみるとそこにいたのは……

「なっ、沙羅！」

あ、先に言われちゃった。

まあいいか。

「どうしたんだ鬼道、知り合いか？」

「知り合いか、じゃ無いだろう！ 覚えてないのかこのアホ！」

「お前！ アホっていうな！ 変な髪形の癖に！」

「何だと！ このサッカー馬鹿！」

「うるさいシスコン！」

あれ、このパターンどこかで……？

「あー、もう二人ともやめてー！！」

二人の後ろにいた紺色のウェーブヘアの女性がケンカを止める。

「もう、なんでこんなところでケンカできるのか知りたいくらいよ

！ 子供の前でくだらないケンカしないで！」

「あ、ああ」

あ、このパターンどっかで見たことあると思ったら涼輔と南沢先輩のケンカと似てるんだ。

そんなのはどうでもいいや。

「それで鬼道。どこで見つけたんだっけコイツ」

あ、コイツ呼ばわりされてしまった。

別にいいけど。

「コイツ、この前天馬と一緒にいただろ。思い出せ」

「あ、そういやいたなあ」

すっごいのんきだな、おい。

「んで、それが何でここにいるんだよ」

「ちよっ！ それ呼ばわりとかひどっ！」

「まあ、いいじゃん。それより何でここにいるんだよ」

だめだ。どうやっても説得できるような相手じゃない。

「もちろん、サッカー部に入るためです！」

「俺もです！」

あ、涼輔忘れてた。

別に涼輔の影が薄いわけじゃないんだけど、周りの人の影が濃いか
らさ。

「おい、俺んとこ忘れてないよな。沙羅」

げっ、気付かれた。

「顔に出てるぜ」

くっそう蘭丸め……。

「何でサッカー部？」

田堂さん、質問の意味がわかりません。

どうやっても今の会話からその質問に繋がらないんですけど

「別にいいじゃないですか」

とりあえずそう答えておく。

「ふーん。お前らサッカー好きか？」

はっ？

意味がわからず目を白黒させる。

「おい、目が点になってるぞ」

蘭丸のやろっ、そんなことしつとるわ。

「三秒以内に答える。さーんにー……」

うわっやばい。

「「サッカー好きです！」」

涼輔ときれいにハモった。

「よし、なら良いや。それと、明日から一週間合宿行くぞ」

『はあああああああああああ！？』

アタシと涼輔どころか、この部屋にいる円堂以外の人物ほとんどが叫んだ。

「お前、今考えたわけじゃないだろうな？」

鬼道、ナイスツツコミ。

呼び捨てなのは放って置いてね。

「んなわけあるか。ただちよつと驚かそうと思ってただけ」

「俺に位は言えよ。いきなり過ぎるじゃないか」

「まあ良いじゃん」

「良くない。はあ、めんどくさい……」

お前ら、お笑いやればいいんじゃないの？とか思ったのは忘れよう。

「合宿、かあ……。しかも一週間……」

「転校二日目とか笑え……ないか」

涼輔は驚きを通り越して呆れたように言う。

「でもさ、サッカー部の皆と仲良くなれるチャンスだぜ？ 頑張れ」

何をだよ。

何を頑張るんだ。

いまいち何言ってたかわからん。

「ったく、やっぱ理解してねえんだろ。お前さ、友達つくんの苦手だったつつか苦手じゃん？ だから、さ」

涼輔はちよつと笑いながら言った。

なんか、心配してないような言い方だな。

ま、いつか。

友達作り苦手なのは事実だし。

「まあ、そういうことになるけど、今日も練習始めるぞ！」

『はい！』

「……って、アタシたち放置かよ！」

「落ち着け。アイツはまあほつといて、お前ら初心者じゃないんだ

る？ ポジションは？」

「俺がMFで、沙羅はGK以外なら何でも大丈夫……だったよな？」

「え？ あ、うん」

いきなり話振られたんでびっくりしたけど、まあいいや。

「でも、まあやれっていわれたらできるけど、ほとんどはFWです」

「そうか。まあ、これに着替える」

そういつてマネージャーらしき女子からユニフォームを受け取り、アタシたちに差し出す。

「着替え終わったらグラウンドに来いよ」

アタシの手に無理やり押し付け、鬼道は去っていった。

「なんか、無愛想つつつか……。まあいいけど」

「それより早く着替えていこうぜ？」

涼輔は鬼道に会えて売れしそうだ。

余談だが、涼輔は鬼道にスッゲーマジで懂れてる。

……なんか、キモい。

「あ、あの……」

張りのある声が掛けられた。

「ん？ 何？」

アタシが振り向くとそこにいたのは青いショートヘアの女の子。

「ふ、二人ともここで着替えるんですか？」

遠慮がち、というより少し驚いたように言う。

「そうだけど？」

「ええ……」

女の子は何故か引いてるようだ。

「なんか、ダメ？」

「で、でも、男の人と一緒に着替えるんですか……？」

「あ、そういうことか。別にアタシは気になんないけど……」

「んじゃ、俺は行くぜ」

『早ッ！』

涼輔の早着替えは知ってたけど、なんかすごい早い。

「先行つてるぞ、沙羅」

そう言い残すと、涼輔はさっさと行ってしまった。

まあ、いいけどさ。

それでアタシも着替えてグラウンドに向かった。

「あ、そういえば名前言つてませんでしたね。わたしは空野葵って
います。よろしくおねがいます！」

さっきの青い髪の女の子が明るいい声で自己紹介をする。

すると連鎖したみたいにほかの人も自己紹介する。

まあ、普通か？

「アタシは瀬戸水鳥。んでコイツは山菜茜。とりあえずよろしくな
！」

「おっけー。よろしく！」

なんか、水鳥とは気が合いそうだな。

2話：異様な入部希望者（後書き）

ケンカシーンが多い気がする。

そして神童のキャラがどうしようもなくおかしい。

拓人「公式のキャラにしてくれよ……」

作者「却下」

蘭丸「おい、俺のキャラは意地悪じゃないんだが」

作者「知らん」

天馬「作者俺より年下の癖に何いばってんだよ」

……これやってるといろいろめんどくさいんでさようなら。

作者除く三人「強引に終わらすんじゃねえ!!」

3話・うるさい二人とバカなアイツ

「だから、嫌だつてば！」

アタシはクラスの子二人に詰め寄られていた。

「ねえ、お願い！ いや、お願いします！ 何でもするからあ！」

ああ、これだから女子は嫌なんだよ。って、アタシも女子か。

「おねがいだよ」。私もと神童と蘭丸に近づきたいんだよ」

今は青柳由維。あおやぎゆい

茶髪でショートヘア。青い瞳が輝く。

クラスのなかで一番背が高いとかそうじゃないとか。

「私もっ！ お願い、このとおり！」

そういつて手を合わせたのは如月ルナ。きんづき

きれいな黒髪で、こちらもショートヘア。

クラスで一番蘭丸と拓人が好きとか何とかで由維と張り合ってる。

「そんなのさあ、アタシに相談するよりサッカー部のマネージャー

になったほうが早くね？」

アタシはもう付き合つてられないというように言う。

すると、由維とルナは目を丸くしたようだった。

「そっか、それがいいや！」「そうだ、それがいい！」

二人そろって同じようなことを言う。

……もう、こんな奴ら放つところ。

さて、寝るかと思ったところに時間を知らせるチャイム。

ちっ、と舌打ちをして、アタシは授業の準備を始めた。

「……ってことで、マネージャーやるって。こっちのルナは」

二人を紹介したところであんなこと言うんじゃないかと後悔した。二人がアタシにずっと質問してくるから、ウザイ。

つまり、部活まで一緒だと質問をされる時間がすごい長くなるって事だ。

うう、めんどくさい。

「なあ、んじゃあ由維は……？」

神童がきよとんとしたようにたずねる。

「もちろん、入部希望です！」

ピースサインをグツと前に出す。

神童の顔すれすれのところに。

「わ、わかったよ。つーか、やっぱりもちろんなんだ……」

戸惑い気味の神童に、私はささやいた。

「由維とルナは、アンタのことが好きみたいだよ。良かったね、モテモテで」

「なっ……！」

神童は一呼吸おくとアタシをいきなり殴りつけた。

「い、痛いじゃないか！」

「バカ！ お前が変なこと言うからだろ！」

「何だと……！」

今度はあたしが殴りかかろうとした時、また殴られた。

今度は後ろから。

「おい沙羅、お前最近おかしい。そんなすぐに頭に血上るなんてさ」それは剣城だった。

「んだよ剣城！ 離せっ！」

いつの間にかアタシの手はつかまれ、自由を失っていた。

「へー、剣城とも知り合いなんだ。お前、ここの何人と知り合いだよ？」

子供の声ではない。

ふと振り返る。

「よっ、お前ら」

それは円堂だった。

あ、円堂で思い出したけど合宿はなんか急すぎるとか何とかで明日に変わった。

それでも急な気はするけど。

そんなことより。

「監督！……って呼ぶのは何かやだから円堂！」

「おいしいおいしい！ お前、呼び捨てやめろよ！」

「入部希望者とマネージャーやりたいて奴がいます」

わめく円堂の次は神童。

「おい、アタシが言いたかったのに。まあいいや。えーと、入部希望つつうのはこっちの茶髪の青柳由維。んで、マネージャー希望つつうのはその隣の如月ルナ」

二人は居住まいをちよつとだけ正した。

ほんのちよつとね。

「ふーん、また女か……。まあいいや。由維、だっけ？ お前サッカー好きか？」

「は？ あ、いや好きですけど？」

予想通り由維は一瞬驚いたようだったが、すぐ返事をする。

「よし。なら今すぐ特訓するぞ！」

「の前にそっちのルナとかいうやつはどうすんだよ」

「あ、鬼道。んーマネージャーなんだから別に良いじゃん」
円堂軽すぎ。

何か、あたしの知ってる円堂じゃなくなってきた……。

ふとそのルナのほうを見ると、彼女は神童と蘭丸にすごい話しかけてた。

それを見る奴らも、蘭丸たちも引き気味。

まあ、あんなに話しかけられて引かないやつはいないだろ。

「よし、気を取り直して練習始めるぞ！」

『はい！』

あ、あたしも行かなくちゃ。

そう思つて皆の後を追いかけて……ようとしたところをルナに止められた。

「ねえ、神童君と霧野君取らないでよ。それさえ良ければ命の保障はするから」

ちよつ、命の保障つて……。

守んなかったら殺されるわけ？

「まあ取るつてたつてアタシあんま男に興味ないから。それより早く練習行かないと円堂に怒られるぜ？」

「う、うん……」

「お前ら遅いぞ！ 沙羅お前グラウンド十周！」

「うげつ、めんどくせえ……円堂一生呪つてやる……」

ていうかこんなんでいちいち呪つてたらめんどくせえな。

そんなことを考えながらちよつと準備体操をして走りだした。

やっと終わった。

グラウンドが意外にも広いから練習する前に結構疲れた。

一休みしていると、円堂がこつちに来て話しかけてきた。

「よし沙羅、終わったみたいだな。んじゃあ皆にペアになつて練習しててつて言つといて。ちよつと俺用事思い出したから。んじゃ！」

うわあ無責任。

ま、別にいいけどね。

アタシは立ち上がつてみんなの元へ走り出した。

「あ、沙羅来た」

蘭丸が言ったから俺はちよつとそつちに気がそれた。
それが悪かった。

「痛ッ!!」

顔面にボールが飛んできた。
マジ痛い。

ボールが当たった衝撃で、後ろに倒れる。

「大丈夫ですか、キャプテン！ すみません……俺が今のボール蹴
つたんです。ほんとにすみません……」

天馬が謝罪し始める。

今の、天馬のボールだったんだ。

アイツ、いつの間にあんなにキック力上がった……？

「おい皆……ってなんかあった？」

沙羅が何があつたかわからないという顔で訊ねる。

「何でもないよ。それと、何か言おうとしてたみたいだけど何だっ
たんだよ？」

説明する代わりにそう答えると、沙羅はため息をついて、

「円堂が『ちよつと俺用事思ひ出したからペアになつて練習してて
だつて」

と一息で言つた。

「ふーん。んじゃ、しょうがない。二人一組でペアになつて練習す
るしかないな」

沙羅から聞いた監督の指示を繰り返す。

「んじゃ、そういうことでそつちのやつらに言ってくるわ」

そつと言うと涼輔さんはちよつと離れたところにいる人たちに伝える
ためそつちの方に行った。

「なあ、沙羅俺と組もう！」

「あ、霧野先輩ずるい！ 沙羅先輩！ 俺と練習しましょう！」
何か霧野と松風が沙羅の取り合いし始めた。

俺は誰と組もう、としばらく考えているとその間に沙羅の取り合いに南沢先輩と涼輔先輩も加わり、すごいことになった。

「あーもううるさい！ すこし黙れ！ アンタ達とは俺やらないし！」

沙羅の怒りが爆発したらしく、自分のことを「俺」と言っている。うわー、そういうやつだったんだ。

まあ、見た目と性格からしておかしくは無いけどね。

沙羅は一人でボーっとしてた浜野のところに何故か行って、

「アンタ相手いないんでしょ？ 一緒に練習しよう！」
といきなり言った。

浜野も浜野で、「別にいいよ」と笑顔で答えた。

すごい。浜野すごい。

沙羅が来たの気付いてもいなかったのにすぐ対応するとか。

俺はたぶん無理。

やつばすごいな……。

「なあ神童！ 由維と練習しよう！」

いきなり話しかけられた。

しかも後ろから。

振り向くとそこにいたのはさっき入部したばかりの青柳由維だった。

さっきも思ったとおり、俺はすぐに対応できなかった。

「お、俺？」

恐る恐る訊ねる。

「そう。神童拓人、あんたに言ってるの。一緒に練習しよう？」

「別に俺はかまわないけど……何で俺？」

思わず変なことを聞いてしまった。

だが由維は笑顔のまま答える。

「だって、雷門中のサッカー部のキャプテンと練習できたら、上手になれると思ったから」

「そっか」

そうか、「雷門中サッカー部のキャプテン」って、そんな風に見ら

れてるんだ。
何かプレッシャー。

沙羅は浜野のほうに行ってしまった。

仕方ない。神童と練習するか。

そう思って神童に声をかけようとする、神童は同じクラスの青柳由維と練習していた。

ちっ、しょうがない。他の奴を探すか。

誰かいないかなー、と周りを見ていたら、

「せーんばい！一緒に練習しましょう？」

……嫌な声が聞こえた。

声の主のほうを向く。

狩屋マサキ。

なんとなく気に入らない一年。

「……何で俺なんだ」

「えー、だって先輩いじり甲斐が……じゃ無かった。先輩サツカー上手いから」

確かに嫌な単語が聞こえた。

いじり甲斐がある？ふざけんな！

「……わかった。一人でいるよりマシだ、早く練習するぞ」

本音を飲み込み、別の言葉を口にする。

狩屋は人の悪い笑みを浮かべた。

「そうこなくっちゃ。んじゃ、俺ボールとって来ますんで」

「それは俺が行く。っていうかここにあるじゃないか」

「あ、本当だ」

舌打ちの音が聞こえたのは気のせいではないだろう。

「おい狩屋。練習する気無いんだったらしくなくていいぞ。どうせボール取りに行くフリして逃げるつもりだったんだろ？」

俺が言っと、狩屋はギクツとしたような顔をした。

が、すぐに平気そうな顔に戻った。

「気付いたならしょうがないですね。わかりました。練習始めましょう?」

その一言で、俺らは練習を始めた。

「はあ……沙羅先輩行っちゃったか……」

「おい、お前何してんだよ」

俺がぼーっとしていると、剣城が声をかけてきた。

「別に何もしてないけど……剣城は?」

「い、いやっ、べ、別に……あのさ、俺と一緒に練習しないか?」

自分から「一緒に練習しよう」なんて言わない剣城が、珍しくそんなこと言ったから、俺は聞いてみた。

「……それを言うために? ってか剣城なんで俺と……?」

すると剣城はちよつと照れて、

「そういう気分になっただけだ」

と言った。

まあ、いいや。

「んじゃ、早く練習しよー」

「ああ」

「ねえ浜野。何でアンタってユニフォームの袖まくるわけ?」

「んー? なんとなく」

なんとなくってなんだよ。

まあ別にいいや。

「なー、俺も沙羅に質問して良い?」

「何？」

「沙羅って一体サッカー部の何人と知り合い？」

う、それは言いたくない。

ていうか言うのめんどくさい。

そう思つて適当に断ると、「お前聞いてきたんだから答えろよ」と言つてきた。

マジめんどくせえ。

ま、別に聞かれて困りはしないからいいか。

「うーんと、神童と蘭丸と……ちよつと待て、ここ転入する前から知つてる人？」

「もちろん」

え、何人だろ。

「神童、蘭丸、天馬、剣城、円堂、鬼道……だから六人！」

「ふーん」

聞いてきたのに別に興味ないというような顔の浜野。

何だコイツ。

こんな意味分からん奴じゃなくて、おとなしそうな速水と組めばよかった。

ま、いまさら後悔しても遅いけど。

「ちゅーか寒い」

「だつたら何で袖まくつてゐるわけッ!？」

3話・うるさい二人とバカなアイツ（後書き）

どうも、サラです。

どーでもいいんですが、私と小説の沙羅とは無関係です。

あと最初のほうに出てきた青柳由維と如月ルナっていうのは自分のリア友です。

こんなウザく無いですけど。

あとなんかラブコメのラの字もないですね。

次話、やっと合宿に行きます！

4話：天馬の暴走（前書き）

一日で書き上げてしまった。

まあ別にいいんだけど、昨日と比べて短くなりました。

4話：天馬の暴走

君は、僕の手を取って笑う。

きれいな髪を風に揺らしながら。

それにつられて、僕も笑う。

君さえいれば、それだけで幸せだった。

僕は、そんな幸せな時間すら忘れていた。

寒い。とにかく寒い。

俺は一人で立っていた。

朝早くから、こんなに寒いのに。

「早いな神童。約束の時間まで一時間もあるぞ」
後ろから声をかけられる。

振り返るとそこにいたのは……。

「監督……脅かさないでくださいよ。というより監督が一時間早く来いって言ったんでしょ？」

「はは、そうだったな。ところでお前、ほんとに沙羅のこと覚えて

ないのか？」

俺の言葉をさらっと受け流し、逆に質問してくる監督。

「覚えてないのかって言われても…… 実際覚えてないものは覚えてないですよ」

俺がそう言つと監督は「そうか」とだけ言つた。
でも……。

「おい神童！ …… って、監督も一緒にしたか」

「おー蘭丸か。さっきの言い方俺が居ちゃ悪いみたいに聞こえたんだが」

蘭丸はその問いに何でもないというように答える。

「そんなことないですよ。ただ監督は遅刻しそうなイメージがあつたので、ちよつと意外だっただけです」

「それは逆に嫌だな」

苦笑いをする監督。

「それよりお前ら寒くないか？ 寒いんだつたらキャラバン乗つてていいぞ」

俺と蘭丸は顔を見合わせ、

「「じゃあ遠慮なく」」
と言つた。

監督はまた苦笑いをした。

俺らはキャラバンに乗り込んで皆を待つことにした。
よし、一眠りするか。

「涼輔ー、置いてくよー？」

アタシは急かすように言う。

「待ってよ沙羅。ていうか自分の荷物くらい自分で持てよ！」

走りながら返事をする涼輔。

何で彼がアタシの荷物を持っているのかっていうと、今朝家を出る前に「ジャンケンで負けたほうが荷物を持つ」というのをやって、涼輔が負けたからっていうだけのこと。

けど何かかわいそうだったんでアタシは手伝うことにした。

「わかったよ。手伝うから早く行こう？」

「サンキュ」

荷物が減った涼輔はすこし安心したようだった。

「よし、じゃあ走るぞ！」

が、アタシがそう言うともた嫌そうな顔をした。

アタシはそれを無視して、走り出した。

アタシと涼輔が着いたところには、大体皆集まっていた。

「監督、まだ来てないのが浜野と多分それと一緒にいこうとしてた速水と沙羅……って、沙羅いつ来た」

着くなり神童にそう聞かれた。

「普通に今来たけど」

「あ、そう」

神童は素っ気ない返事をする。

「なあ、来てないの浜野と速水だけでいいのか？」

円堂が聞くと、

「あ、はい。その二人だけです」

神童が答えた。

「ねえたつくん」

「何」

「眠い」

「んなこと知るか。あ、キャラバン乗ってて良いよ」

アタシの言葉に返事をし、ついでに付け足して言う神童。

アタシはわかったと答えてから、涼輔の手を引っ張ってキャラバンに向かった。

「おい速水！ 早く走れよ！ 遅れちまう！」

「誰のせいでこうなったと思ってるんですか！？ っていうか僕が本気出したら浜野君置いていきますよ！？」

ああ、走りながら喋るの疲れる。

ちゅーか速水足速いんだった。
忘れてた。

「ちゅーかそんなこといいから早く行こうぜ！」

「あーもうわかりましたよ！」

「あ、あれ浜野と速水じゃないか？」

蘭丸がアタシの頬をつつきながら言う。

くっそ、むかつく。

「蘭丸、それやめてくれない？」

「それって、沙羅のほっぺつつくの？」

首を立てに振る。

「えー、やだ。沙羅のほっぺぶにぶにして気持ち良いんだもん」

「やめろって言うてるんだから、やめてやれよ。嫌われるぞ？」

声の主は瀬戸水鳥。

なんか、天馬の応援をしてるとか聞いたけど、昨日の練習の時の見てたらそうっぽい気がしてきた。

ていうか声でかい。

耳痛くなったし。

蘭丸は怒られている子供みたいにしゅんとしていた。

ざまあみろ。

すると、

「ふー、間に合った」

「全然間に合ってませんよ浜野君。三十分も遅れてます」

浜野と速水がやっと来た。

「よーし、みんなそろったな。それじゃ、しゅっぱーっ！」

「しゅっぱーっ！」

円堂の掛け声が続いて、浜野も元気な声を出す。

ふう、やっと出発できる。

どこかは知らないが、目的地に着くまでしりとりしよう！

……ということになった。

これは、狩屋と天馬が提案した。

といってもほとんど天馬がやりたかっただけのようだが。

「キャプテン、「さ」ですよ！」

その本人、天馬が俺に話しかける。

「さ」かよ……。

さ……さ……。

「サッカー大好き松風天馬」

「ちよつ、それひどい！」

みんなが笑い出す。

俺も釣られて笑い出す。

天馬だけは拗ねてしまったようで笑わなかった。

「んじゃ俺は「ま」か……」

蘭丸はそういつて考え出す。

「どうしよう、思いつかない」

こういうときに限って思いつかないようで、唸りながら考える蘭丸は、なんだかちよつとおかしかった。

「松風天馬じゃダメなのか？」

「人の名前はダメです」

狩屋は意地悪そうに笑う。

「じゃあ「松風天馬」に振り回される狩屋」

「「先輩酷い！」」

狩屋より天馬のほうがショックだったようで、余計落ち込んでしまった。

「大丈夫か天馬？ 次は剣城だな」

俺は天馬を慰め……たのかは知らないが、剣城にまわす。

「お、俺も……？」

「そう。お前も」

剣城はあらかさまに嫌な顔をしたが、しょうがないといったように考え出す。

「「や」か……。『やりたくないしりとりなんて』」

「何本音言ってるんだよ」

剣城の答えに対し、蘭丸は突っ込みを入れる。

「別にいいでしょう？ 次は誰？」

浜野が言うつと、沙羅が「アタシ！」と言って手をビシッと挙げる。

「うーんと、「て」だから……。『天然パーマ』！」

「誰が天然パーマだあああああー！」

天馬とは言ってないのに反応してきた。

「別にお前だとは言ってないんだが」

「そ・う・で・す・か！」

なだめようとしても怒りが治まらないようだ。

「ちゅーかまた「ま」かよ……」

「がんばれ速水！」

「ちよつ、次僕ですか？」

「そう」

「うっ……」

速水はまだ何か言いたそうだったが、しぶしぶ引き下がった。

「『まだまだ怒る松風君』」

「ふっざけんなあああああああああああああああー！」

「みんな、これから天馬の名前入れないようにしよう？」

俺がそう言つと、みんな頷いた。

「なんか後ろが騒がしい気がするんだけど気のせいかな鬼道」

「俺に聞くな。でも騒がしいのは事実だと思うんだが」

「だよなあ」

俺はふう、と溜息をつく。

「ところで円堂。どこに向かっているんだ？」

鬼道はずっと気になってたんだけど、と言つように訊ねてきた。

「うーんと、まあ、着いたらわかるさ」

俺が曖昧に返事をしてごまかすと、鬼道は顔をしかめた。

まあ、別にいいよね。

4話：天馬の暴走（後書き）

今回合宿とかいったけど行く途中で終わってしまった。
まあ、次回にご期待を！w

5話・沙羅と海と俺と蘭丸と……って、多くね？（前書き）

いやあ、やっと合宿これたよ。

というか、特訓らしいことしてたっけ？

5 話：沙羅と海と俺と蘭丸と……って、多くな？

何だここは。

サッカー部の合宿ってこんなとこでやるのかよ。

着いた場所は

沖縄だった。

「監督！ 何で沖縄なんですか！？ 意味わかんないですよ！？」

アタシの気持ちを代弁するように、神童が大声で言う。

だが別に気にした様でもなく、「まあいいじゃん」と軽く受け流す
円堂。

まあ別にいいけど。

「よしじゃあいくか！」

「どこにだよ」

ハイテンションな円堂に冷静なツッコミを入れる鬼道。

マジで二人で漫才やればいいのに。

「もちろん綱海のとこ！」

「何でだよ」

「えー良いじゃん」

「いや良くねえだろ」

「よっ、久しぶりだな！」

「何か噂をすれば来やがった！」

「来ちゃ悪かった？」

「出来るなら来ないでほしかった！」

「鬼道ちゃん何気にひどいね」

「なぜお前が出てくる不動！」

「まあ良いじゃん良いじゃん」

「何かそのノリでいくと他のやつまで出てきそうなのがするんだが」
「それは考えすぎだぜ鬼道」

「そうだぜ？ まあ佐久間あたりなら出てきそうだけど」

「いや、やつぱこれ以上人が増えると困るだけだからやめろ」

「えー賑やかな方が良いだろ」

「その性格がイライラする」

「いやあ、どうも」

「褒めてないんだが」

「すみません、状況教えてもらっていいですか？」

やつとの思いで話に割り込むと、「はあ？ うるせえんだよこの小娘が！」とでもいうような視線を不動と呼ばれた男はアタシに向ける。

「まあ、教えるがその前になぜお前敬語？」

「えー、何となく。というかそういうセリフをどっかで聞いたことがあったから」

「意味分からん。えーと状況は……見ての通りだ」

「いや、わからんから」

二人で意味がわからないことを言い合う。

アタシの思考までおかしくなってきた。

「まあとりあえず荷物置いてから砂浜走るぞ！」

円堂、いきなり出てくるんじゃない。それより、

「う、海は嫌だ……」

「何？ 沙羅海でなんかあったの？」

浜野が聞いてくる。

アタシが答えずうつむいてしていると、代わりに涼輔が答えた。

「沙羅にはいろいろあるんだよ、うん」

…… 答えになっではないけど。

「まあ、その話は追いつ追いつ話すよ」

「んじゃあ別にいいや。よし、早く行こうぜ！」

そう浜野が言つとみんなが監督が言つたほうへ走り出していった。

「沙羅に何があったのかは俺にはわからないけど、早く行こう？」
神童が一人取り残されたアタシに声をかける。

アタシはそれに小さく答え、神童の手を取って走り出した。

俺は沙羅に手を取られ走る。

沙羅に手を触れられたとき、俺はドキツとした。

男女間という意味もあつたけど、何か別の意味もあつた。

それがどういう意味だったのかは、よく分からない。

ただ、何となく懐かしかった。

それは、蘭丸のいうように俺と沙羅が幼馴染だったからかもしれない。

けど、思い出せない。

いつか思い出せるのかな……………？

「あー！ 沙羅先輩とキャプテン手繋いでる！」

天馬のその声のせいで狩屋にボールぶつけられた。

何でこんなときにそんな事言っただよ！

というか狩屋絶対ワザとだろ……。

くっそ、むかつく。

まあ、いつもの事だけど。

俺はイラつく心を静めようと深呼吸し、また歩き出した。

「霧野せんぱ……ぐふう」

最後まで狩屋が話せなかったのは、俺が腹を思いつきり殴ったからだろう。きつと。

「何するんですか霧野先輩！ ひどいです！」

「嫌なら話しかけるな。今、最高にイライラしてるんだ。お前の所為で」

わめく狩屋にそう告げ、俺は足を速めた。

後ろのほうでは狩屋と速水が何か話していた。

「……じゃあ、イライラしてる霧野先輩には近づかないほうがいいってワケですか？」

俺は速水先輩に確かめる。

「ええ。力がいつもの十倍ぐらいになりますから。さっき狩屋君を殴った時ののは、本気の5%くらいですかね」

霧野先輩、怖い。

強い。

さっきのでもかなり痛かったのに、本気出されたら俺死にかけるし。でも霧野先輩にそう言っても「そのまま死んでしまえ」とか言うんだろつな。

霧野先輩にちよっかいを出すの、やめようかな……？

「ふう、着いた着いた。よし、皆！ 砂浜走るぞ！」

「おー！」

元気なのは浜野一人。

というか今も走ってきたのに、また走るのか……。

「……それとも海で泳ぐか？」

あ、そっちのほうのマシ。

「何か神童がそっちのほうがマシみたいな顔したからそうしよう！」

『何その決め方！？』

みんなが突っ込む。

「まあ、良いじゃん。それと、俺に意見するのは許さん！ それじゃあよござ！」

監督はいきなりパーカー脱いで、中も脱ごうとした。

「おい円堂、ここで脱ぐな」

コーチが冷静に突っ込みを入れる。

ナイスツツコミ。

「とりあえず、まだここに荷物置きっぱなしだから、せめて片付けてからにしてくれ」

「ちえっ、わかったよ」

「う、海はやだあ」

沙羅が半分涙目で言う。

「じゃあお前何してるんだよ！？」

円堂監督が責めるように言う。

「うう……」

沙羅はもう泣き出しそうだった。

うわー。

神童じゃあるまいし泣くなよ、と俺は思った。

沙羅はとりあえず着替えたものの、「やっぱり海怖い！」といって拗ねてしまった。

俺が説得すると、最初よりは嫌がらなくなった。

そこに円堂監督が追い討ちをかけ、現在に至る。

「一回だけでいいから入れよ。入らないと退部しても」

「入ります」

やっぱり退部は嫌なようだ。

「よし。それじゃ、蘭丸。後は頼んだぜ！」

「ちよつ、監督っ!？」

俺は声をかけるが、監督は走っていつてしまっていた。

「蘭丸、アタシじゃ嫌……?」

沙羅が甘えたような声を出した。

その目にはまだ涙がたまっており、うるうるしていた。

うつ……、嘘でも嫌とは言えない。

「……そうじゃなくて、いきなり言われたからちよつとびっくりしただけ。それじゃ、行こうか」

「……うん」

俺は手を差し出し、沙羅はその手を握った。

5話・沙羅と海と俺と蘭丸と……って、多くな？（後書き）

なんか要領オーバー！。

このお……。

6話・沙羅と海と俺と蘭丸と……って、多くな？その2（前書き）

入らなかったんでその2。

6 話：沙羅と海と俺と蘭丸と……って、多くな？その2

「ああっ！？ 沙羅先輩の格好……！」

天馬が叫ぶ。

俺は思わず天馬が指差す方向を見る。

するとそこにいたのは……。

やっぱ無理。

見てられない。

無理無理無理無理。

あーもう言っわ。

沙羅はビキニを着てた。

後から聞いた話では、水着選んだのは監督だったらしい。

エロいんだよ監督うっうっうっうっうっうっ！

「ちよつ、神童大丈夫かつ！？」

その所為で俺はおぼれかけた。

いや、おぼれた。

だから、蘭丸の声も聞こえなかった。

というか蘭丸、よく平気だったな。

俺だったら目もあわせられない。

というか、何でこっぴどいとき天馬がすぐ発見するんだ……？

「ちよつ、神童大丈夫かつ！？」

アタシを見て神童は、何故かおぼれた。

何でだよ。

「沙羅先輩、その格好エロいです」

「知らないし」

天馬が顔を真っ赤にして言った言葉を切り捨てる。

「つか、この格好エロいのか？」

確かにまあスースーするけど。

神童を助け出そうとする蘭丸を無視して、アタシはちょっとだけ海の中に足を入れてみた。

「つめたっ」

足を引っ込める。

「ちゅーかそんなとこ突っ立ってないで早く泳ごうぜ！」

浜野がアタシの肩に腕を回し、引っ張る。

まあ、遠くから見たら浜野がアタシにラリアットしたみたいに見えるたかもしれない。

「ひゃあっ！」

いきなり、足を持ち上げられた。

「沙羅軽っ！　なあ、このまま入るぜ？　用意してるよ」

浜野はアタシをいわゆる……お、お姫様抱っこして、そのまま海に入っていく。

「浜野ずるい！」

南沢先輩の声が聞こえる。

だが特に気にした様でもなく、浜野はそのまま進んでく。

「は、浜野……？」

「大丈夫？　もうすぐ沙羅も浸かると思うけど」

浜野の声で気がついた。

水面はもうアタシの足先まで近づいていた。

はやいなあ……。

そう思っていたのもつかの間、

「ひゃうっ！」

浜野がいきなり足を支えていた手を離れた。

アタシは思わず浜野の首に捕まった。

「……くくっ、沙羅って面白い……。ちゅーか海の何がそんなに怖かったん？」

浜野は陽気に聞いてくる。

アタシは何かそれが気に入らなかったの、思いつきビンタしてやった。

ああもう、イライラする。

「いったあ！ そんなに嫌だった？ ごめん」

「……別に」

アタシはぶいっと顔を逸らす。

と、そこにはニヤニヤ笑う狩屋がいた。

「いいですねえ、仲良くて」

アタシは余計イライラしてきたから、狩屋の頭を思いつきり水の中に沈めてやった。

その後、上から思いつきり叩いた。

何だってアイツは人をイライラさせるんだ。

「沙羅、ナイス」

蘭丸がやって来て言った。

「ちょうど俺もイライラしてたんだ。助かった」

「そりゃあどうも。けどこんなんで助かったとか言われてもうれしくもなんとも無いんですけど」

アタシが言っと、蘭丸はクスツと笑った。

それが女の子みたいで、かわいかった。

「お前、今俺のことかわいいとか思わなかったか？」

う、凶星。

何でわかったんだ。

「顔に出てるって」

浜野が楽しそうに言った。

うう、そんなに顔に出るタイプなのか、アタシは。

「とりあえず、お前海なんで怖かったわけ？ もう平気みたいだけど」

あ、ホントだ。

何でだろう。

まあいいか。

「なあ早く教えてくれよ！」

浜野が急かすから、アタシはところどころ思い出しながら話した。

「えーと、確かあれは十歳のときかな？ 四年前に涼輔の親に海に連れてつてもらったんだ。それでアタシが泳いでるときに涼輔がアタシのところさっきアタシが狩屋にやったみたいに頭を水の中に沈めてきてそれで……そっから覚えてない」

そりゃそうだ。………と思う。

いや、知らないけど。

「つーかその狩屋はどうした」

「あ、忘れてた」

忘れてたのか。

まあ、俺もだけど。

「あんな奴、ほっとこうぜ？ 関わるとうるくな事が無い」

蘭丸が呆れたようにっていうか、本当にどうでもいいように言う。

「んで、沙羅泳げるの？」

いきなり話を違う方向に進めるな浜野。

「うーんと、たぶん無理」

沙羅も乗るなつて、え？

「アタシ、カナヅチなんだ」

「じゃあ何でお前平気そうなんだよ」

俺が尋ねると、

「狩屋を踏んでるから」

「ふーん。………って、おい！ 忘れてたんじゃなかったのか！？」

というか狩屋大丈夫なのかよ！？

意外な答えが返ってきた。

「さっき狩屋の話したから思い出した。まあ別に踏んでるっていつでも水の中だし」

いや、水の中だから余計危ないんだし。

アイツ、息してるのか？

というかいつの間に踏んだ？

「まあ、アイツは嫌なことからすぐ逃げるし、これも別に嫌じゃなかったってことなんじゃないのか？」

なんだかんだ言っても狩屋のこと一番知ってるのは蘭丸な気がする。

「せーいかーい。霧野先輩、よく分かりましたね」

「ちよつ、狩屋のバカッ！」

沙羅は思いつきり狩屋の頬をグーパンチした。

沙羅お前、キーパー出来るんじゃないのか？

出来ないとか言ってたけど。

「それより沙羅、一旦戻ろうか」

俺が言うと、沙羅は首を大きく縦に振った。

「あー、沙羅先輩ひどいですよ！いきなりグーパンチなんて！」

相変わらず怒っている狩屋にアタシは「ごめん」と一応謝っておく。

まあ、狩屋のほうも一応悪いわけだし。

「んでたつくん、これからどうするの？」

「沙羅に泳ぎを教えようと思ったけどたつくんって呼んだからやめる」

「あーもうわかったよ。もうたつくんて呼ばないから教えてよ！」

……多分呼ばない。

多分。

そつえば前、蘭丸に「沙羅の多分ほど頼りにならないものは無い」って言われた気がする。

まあ確かにその通りだけど。

「……本当だな？」

訝しげに聞いてくる神童。

「もちろん！ それじゃあれからなんて呼ぼうか」
「今はそんなことより泳ぎの練習だろ？ ほら、こっちに来い」
「はい」

神童が沙羅に泳ぎの特訓をしてる間、俺はさっき一緒にいた浜野、狩屋と一緒に話していた。

「それにしても、沙羅ちゃんって制服は思いつきり似合いませんけど、水着は似合うんですね……」

速水が溜息雜じりに言う。

「まあそうだね。ちゅーかどこみてるんだよ速水」
「確かにそうだ」

浜野の言葉に俺が肯定すると、速水は顔をしかめた。

「全体の雰囲気のことを言ってるんです」

「ちえっ、つまんねえの」

何をつまらながってるんだ、浜野。

「先輩たち、泳がないんですか？」

後ろから天馬が声をかけてきた。

「まあ、ちよつと休憩してたんだよ。ちゅーかそういうお前は何してるの？」

浜野が逆に訊ねる。

「俺は沙羅のところ見てただけです」

「大胆だな」「大胆ですね」

速水と俺は同じようなことを言う。

「いやあ、でも松風は元から大胆じゃん？」

「まあ、確かに。でもなあ……」

俺はちよつと何か考えてる速水を横目に、沙羅と神童の方を見た。
くっそ、神童が羨ましい。

俺なんか手を握っただけなのに……。

けど浜野は沙羅のとこ抱っこしてたしなあ……。

「何悩んでるんですか？　ったく、先輩らしくも無い」

狩屋がいきなり出てきて言った。

悩んでるのが俺らしくないって……。

お前が悩んでるほうがお前らしくないわっ！

危うく、口から出るところだった。

「それより、『腹減ったしちようど昼だし早く飯食おうぜ！』って、監督が言っていましたよ」

余計なことを言わず、そっちを先にいってくれ狩屋。

ま、いいか。

「やった、飯だぜ！　よし。松風、速水、狩屋、行くぞ！」

「俺は無視かい」

「え？　霧野は神童たち呼んでくるだろ？」

そういうことか。

「んじゃ先行ってるからな！」

早く飯を食いたくてたまらない2人と迷惑そうな顔をした2人は、走っていった。

さて、俺は神童たちを呼んでくるか。

「しんどー、沙羅ー、飯だつてよー」

神童とアタシを呼ぶ蘭丸の声が聞こえた。

その声に気付いたのか神童は、ふと顔を上げる。

アタシの顔は、神童の細い手で押さえつけられ水の中。

くっそ、アタシの腕より細いの……！

手に込められていたチカラが、不意に弱まる。

その隙にアタシは水面から顔を上げる。

ふう、やっとだ。

「沙羅、ちよつとは泳げるようになったのか？」

蘭丸は昔と変わらない意地悪な笑みを見せる。

「何でそんな顔するのさ。まあ、ちよつとは泳げるようになったよ」

「へえ、こりや驚いた」

「バカ蘭丸ッ！」

アタシが蘭丸に襲いかかろうとした瞬間、神童に後ろから押さえ込まれた。

「こんなところでケンカなんかしてないで、早く飯食いに行こうぜ？」

「うう……」

アタシはしぶしぶ従った。

昼ごはんを食べている最中、アタシは神童をなんて呼ぼうか考えていた。

「どうしたんだ沙羅。元気ないぞ？」

蘭丸がアタシの顔を覗き込むようにして話しかけてきた。

「大したことじゃないけど、神童をなんて呼ぼうか考えてて……」

「ほんとに大したことじゃないな」

「そんなこと言わないでよ。本当に困ってるんだから」

じゃあ、と蘭丸は人差し指を立てる。

「その一、俺のことみたく下の名前で呼ぶ。その二、浜野のことみたく苗字で呼ぶ」

それしかないよなあ……。

「その三」

は？ まだあるの？

「茜みたいに『神さま』って呼ぶ。この三つのどれかしかないぜ？」
何だよそれ。

「まあ三は却下させてもらうね？」

「何でだよ」

「それなんかアタシが神童のファンみたいだから」

「あつそ」

蘭丸は呆れる。

「はー、アンタって昔から変わらないね。変わったところといえば、身長と体重と顔ぐらいだよ」

「お前もさ。あと、涼輔さんも」

「あ、その存在忘れてた」

「バカか」

蘭丸はまたも呆れる。

「バカじゃない。……アタシ達、何も変わってないんだね」

「……ああ。変わったのは」

「神童だけ、か……」

アタシはいろいろ思い出しながら話をつづける。

「アイツ、いつの間に泣き虫になったの……？」

「それどこから聞いたんだよ」

「天馬から」

「あーあ。せつかくの雰囲気全台無しにしてくれちゃったよ、天馬」

蘭丸は片手で顔を覆った。

うーん、コイツ意外とかっこいい。

最近出てきてないけど、由維とルナが惚れるのもわかる気がする。
ちよつとだけ。

まあ遠くで見てる分にはいいんだろうけど、近くで一緒にいるとすごい危ない奴だからなあ……。

「そついや神童をなんて呼ぶか考えてたんだよな」

本題を思い出した蘭丸が言う。

「やっぱ、下の名前で呼んだら？」
「なんで？」

「だって、そのほうが神童うれしいと思ったから」

「別に俺はどっちでもいい。それと俺は泣き虫じゃない！」
いつの間にか蘭丸の後ろに来ていた神童。

「拓人、来てたんだ」

「やっぱ下で呼ぶな」

「却下しまーす」

「何でだよ」

「だって皆と違う呼び方がいいんだもん」

「もういい。あ、後十分ぐらいしたら練習はじめるってよ」
最初っからそれだけを言えッ！

「わかった。サンキュ」

蘭丸が言うのと、神童は去っていつてしまった。

何か神童いつもと違う気がする。

「どうしたんだ？ そんなぼーっとしちまって」

後ろから声をかけられた。

振り向くとそこにいたのは、円堂が最初会おうと思ってた人物、綱海さんだった。

それにしても、この人テンション高い。

「もうすぐ練習始まんだろ？ シャキツとしていけよシャキツと！」
元気そうな声で言う。

テンション高い、ついていけない。

話に割り込む隙が無い。

「まあ、何でもノリと気力でどうにかなるさ！」

「天馬みたいなこと言うんですね……」

蘭丸はアタシにいつも言うように呆れた口調で言う。

「天馬？ ああ、あの天然パーマの1年か」

「天然パーマっていうなあああああ！」

天馬のいた場所は、ここから十メートル以上離れている。

そこからなぜか先ほどの「天然パーマっていうなあああああ！」
と言いながら走ってきた。

聞こえたのもすごいし、速さが半端なかった。

来るまで多分1秒かからなかったと思う。

はや……。

だがそれを気にした様子も無く、綱海さんは「わりいわりい」などと謝ってる。

何なんだこの人……。

アタシは尊敬を通り越して畏怖の眼差しを向けていた……と思う。

なんで気にしないでいられるんだ……。

円堂の知り合いって、すごい人ばかりだ……。

鬼道は突っ込みまくりだし、円堂の奥さんは料理が超次元だし、鬼道を『鬼道ちゃん』なんて呼ぶ人はいるし……。

すごいな。

そんなことを考えてたら、午後の練習が始まった。

午後は、サーフィンするとか何とか。

うわー、今度も海か……。

まあ、沖縄にわざわざ来たんだからそれくらいしないと損か。
とりあえず、そう考えておくことにした。

6話・沙羅と海と俺と蘭丸と……って、多くな？その2（後書き）

ああ、なぜ2部になっちゃったんだろう……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8609x/>

俺の幼馴染は変わり果てていた イナズマイレブンGO

2011年12月29日21時45分発行